

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより



▲「東京市小石川区江戸川 隆慶橋下流」

第20号 / 平成25年6月21日発行

受け継がれた住まい ―今に生きる文京の近代建築― 2

旗本がみた幕末の大奥 ―田村家資料の世界― 4

館蔵資料より 『老樹名鑑』と室田老樹齋 6

平成24年度のあゆみ 7

平成25年度の催し 8

受け継がれた住まい 今に生きる文京の近代建築

文京の近代建築の今

文京のまちを歩いていると、さまざまな歴史的建造物に出会うことができます。落ち着いた佇まいの住宅、銅板の貼られた商店、荘厳な寺社建築…。古い建物は、まちの景観を形づくる重要な要素であり、まちの歴史を身近に感じさせてくれます。このような歴史的建造物は、区内にどれくらいあるのでしょうか。

国、都、区、それぞれに文化財に関する指定・登録等の制度がありますが、区内の建造物関係では、重要文化財・国指定史跡7件、国登録文化財51件、都指定文化財（史跡・名勝含む）8件、区指定文化財10件、合計76件があります（平成24年度末現在）。

また、文京ふるさと歴史館では平成10年度に「文京区歴史的建造物（近代）悉皆調査」として、近代（明治～昭和20年頃）に建てられた建造物を中心に、区内全域を専門の調査員により目視で調査しました。その時抽出された数は約1,650件。これらは関東大震災、第二次世界大戦の空襲という災禍を免れ、高度経済成長期やバブル経済の荒波を越えて残った建物です。しかし調査後も時の流れとともに、目に見えてその数は減少していきました。その現状を数として把握するため、平成24年末、追跡調査を行いました。地図上でのチェック、目視での確認を行い、また前回見落としとして新たに確認したものを追加すると約850件が存在し、約15年で半減している現状がわかりました。

建物をとりまく社会的な情勢や周囲の環境は、絶え間なく変化し続けており、それに伴って姿を消していく歴史的建造物もあとを絶ちません。まちの景観や懐かしい風景も、それによって刻々と変わっていきます。

そのようななかでも、今に受け継がれ、住み続けられ、大切に使い続けられている建物があります。千駄木・旧安田楠雄邸庭園、本郷・瀬川家住宅、目白台・村川家住宅。これらはその代表格であるといえます。

やすだくすお 旧安田楠雄邸庭園（千駄木 5-20-18）

旧安田楠雄邸庭園（以下、旧安田邸）は、大正8年（1919）、旧本郷区駒込林町に建てられた和風住宅です。施主は豊島園を創設した実業家・藤田好三郎で、施工は清水組（現、清水建設）。安田家の所有となったのは、関東大震災直後の大正12年秋で、日本橋小網町（現、中央区）で被災した安田財閥・安田善次郎の三女・峯子、善四郎夫妻が移り住み、その後、長男・楠雄が受け継ぎました。

建物は木造2階建てで、細長い敷地に合わせて東西に雁行して建てられ、南側には枯山水の庭園が造られました。大玄

関から続く畳廊下を進むと、唯一の洋間である応接間があり、その周囲には庭が一望できるサンルームが配されています。1階中央には2畳敷の大きな床のある残月の間、その奥に茶の間、台所、浴室、仏間と続きます。2階の客間からは、見事な庭の眺望が楽しめます。藤田家、安田家時代の家具や調度品、生活用具等も多く残されており、90年を超えた現在でも、当時暮らした人々の息吹を感じることができる屋敷です。



旧安田邸 庭からみた主屋

旧安田邸のある旧駒込林町は、団子坂を上った本郷台地上にあり、周辺に彫刻家・高村光雲、鍍金家・豊周父子、光雲の長男・高村光太郎、智恵子夫妻、建築家・中條精一郎とその娘で作家の宮本百合子、建築家・渡辺仁、日本画家・児玉希望などが住んだ地域です。平塚らいてうによる青鞥社発祥の地や、文豪・森鷗外宅（現、森鷗外記念館）も近く、文学・美術とも関わりが深いまちです。島蘭邸（国登録）、半床庵（都指定）などの歴史的建造物も残っています。

現在、旧安田邸は保存・活用されていますが、ここに至るまでの道のりは、決して平坦ではありませんでした。平成7年（1995）、楠雄氏の逝去後、建物に存亡の危機が訪れました。建物を残したいという所有者や地域の人々の想いを受け、ボランティアによる調査や活用提案などの働きかけや努力が実り、結果、（公財）日本ナショナルトラストへの寄附という形での保存が決まりました。平成10年に東京都指定名勝となり、建物の修復を経て、NPO法人文京歴史的建物の活用を考える会（通称、たてもんの応援団。旧安田邸の保存活動が契機で結成）が管理委託を行い、旧安田邸サポート倶楽部の熱心なボランティア活動による活用がなされるようになりました。平成19年から建物の一般公開を開始し、季節に合わせたイベントの開催、コンサート、展覧会等、活発な活動が行われています。しだれ桜や紅葉、安田家旧蔵の雛人形・五月人形など、四季折々の旧安田邸を愛でるために、年間を通じて多くの人々が来訪しています。

せがわ 瀬川家住宅（旧古市家住宅）（本郷 2-35-10）

瀬川家住宅（以下、瀬川邸）は、旧本郷区本郷弓町に建てられた和風住宅です。創建年代は詳らかではありませんが、土木学者であり、工科大学長、内務省土木局長、貴族院議員を歴任し、男爵となった古市公威が、明治20年代から居

住しました。玄関を入ると畳廊下が続き、応接間である洋間に至ります。能楽を趣味とした古市は、応接間に敷舞台を造り、自ら演じたといひます。その奥にある12畳半の大広間も当初のまま残っている部分です。

関東大震災後、古市の長女・喜子とその婿で医学博士・瀬川昌世が、この家を受け継ぎました。昌世は、茶道を嗜む喜子のために、昭和初期、茶室・一指庵などの増改築を行いました。さらに昌世の娘婿・功は、庭師・田中泰阿弥の指導により、茶室・苔庵の建築や、苔庭の整備を行いました。

旧本郷弓町は明治時代以降、貴族院議員・辻新次、医学博士・田口和美や薬学の丹波敬三、国学者・物集高見、元幕臣で医学博士の田村光顕が出た田村家など、医者や学者が多く居を構えたまちでした。瀬川邸の南隣は医学博士・青山胤通邸で、両家を仕切る煉瓦塀には、直接行き来できる扉が設けられました。これ以外にも古い煉瓦塀がまちの数か所に今も残り、かつてあった邸宅の名残を伝えています。近年姿を消した古い建物も多く、瀬川邸の向かいにあった旧駒沢邸(中山邸・レストラン楠亭)も大クスノキだけが残されました。本郷弓町教会と瀬川邸は、この地域に現存する数少ない歴史的建造物となりました。



瀬川邸 玄関

瀬川邸は今、その青々とした苔庭と鬱蒼とした樹木を茂らせながら、ビルの間に静かに佇んでいます。建物を将来に残すことを決めた瀬川家では、関連企業である昌平不動産総合研究所が敷地内にビルを建設し、その地代収入で瀬川邸の建物を維持してきました。そして平成15年に国登録文化財となりました。現在は同社が瀬川邸を所有し、邸内の事務所で業務を行うとともに、建物の保存、維持管理を行っています(通常、一般非公開)。

むらかわ 村川家住宅(目白台3-18-9)

村川家住宅(以下、村川邸)は、明治44年(1911)、旧小石川区雑司ヶ谷町に建築されました。施主は西洋史学者・村川堅固で、棟梁は白山御殿町の片山清太郎でした。主屋は木造2階建の和風建築で、玄関を入ると中央に廊下があり、その南側に座敷と老人室、北側に台所や浴室が配されました。独立した西洋館が付属し、大正4年(1915)に1間の増築が行われました。また大正9年に石蔵、昭和8年(1933)には



村川邸 西洋館と主屋

長男・堅太郎の結婚を機に離れが建設されました。

家を受け継いだ堅太郎も西洋史学者で、当初芝生だった庭に戦後自ら苔を植え、庭木の剪定などにも心を配りました。

村川邸について特筆すべきは、創建当時の図面、仕様書、契約書等が残されていることです。また家計簿には、建物の維持管理についての出費も細かく記録されています。これらは、建物の歴史を知ることができるという意味でたいへん重要であり、また地域の歴史を知る上でも貴重な資料です。

村川邸のある旧雑司ヶ谷町は、護国寺のある音羽通り付近から、目白台の高台に位置し、豊島区との区界にも近い場所です。周囲には、かつて村川家が仕えた肥後・細川家の屋敷や、明治の元勳・山縣有朋邸(椿山荘)、田中光顕邸(蕉雨園)もありました。また近くには成瀬仁蔵が創立した日本女子大学があり、歌人・窪田空穂、章一郎父子、日本画家・杉山寧、作家・大町桂月らも居住した地域です。

村川邸は平成10年に国登録文化財となりました。現在は村川堅固・堅太郎の子孫が、大切に家を守りながら住み続けています。創建100周年を迎えた平成23年、記念行事として見学会、子供向けワークショップ、シンポジウムなどの企画を、工学院大学の協力を得ながら所有者自らが取り組むなど、公開や活用にも尽力されています(通常、一般非公開)。

想いを受け継いで

旧安田邸、瀬川邸、村川邸は、歴史的建造物として残された貴重な文化財であるだけでなく、建物を造った人、かつて住んだ人々の想いを、現在建物に関わる人々がしっかりと受け継ぎ、慈しまれながら、現代に生き続ける建物です。

平成25年度特別展では、文京区の歴史的建造物の現状とともに、今に生きる建物・旧安田邸、瀬川邸、村川邸を紹介します。建物に関わった人々や、建物を育んだまちの歴史もあわせて、さまざまな資料を展示いたします。みなさまのご来館をお待ちしています(会期:10月19日~12月1日)。

(川口明代)

※旧安田楠雄邸庭園の公開日は毎週水曜と土曜です。

※瀬川邸、村川邸は非公開です。公道から見える外観のみを静かにご覧いただき、敷地内に立ち入ることはできませんのでご注意ください。

旗本がみた幕末の大奥

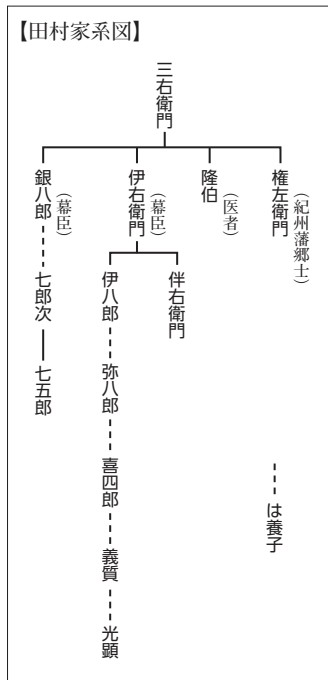
～田村家資料の世界～

江戸時代の文京区域には、多くの武家屋敷がありました。現在もその名残りを伝えている、加賀藩前田家や水戸藩徳川家などの大名屋敷だけでなく、湯島、本郷、小石川、小日向などの地区には、旗本・御家人と呼ばれる中小幕臣の屋敷も、多くあったことが知られています。

文京ふるさと歴史館の開館以来、多くの資料をご寄贈いただいている田村家は、本郷御弓町（現、本郷二丁目）に、昭和43年まで住んでいた幕臣の家系です。代々の当主の仕事や、家系に関する史料、生活の様子を伝えるものなど、様々な資料が残されています。

弓町田村家のはじまり

田村家は、三右衛門義照（～1739）が享保10年（1725）に紀伊国（現、和歌山県）から江戸にのぼり、幕府に仕えるようになりました。当時の江戸幕府では、紀州藩主出身の8代将軍徳川吉宗（1684～1758）のもとで農政改革が進められており、美濃郡代などを務めた井沢弥惣兵衛（1654～1783）を始め、紀州から多くの人材が幕府に仕えるようになっていました。三右衛門も在方普請役という、土木工事を担当する役職についています。



三右衛門は、長男の権左衛門に紀州郷士としての家を継がせて上京しました。その他の息子たちは、次男の隆伯は医者に、三男の伊右衛門義方（～1793）、四男の銀八郎（～1768）は、父と同様に在方普請役として幕臣となりました。

伊右衛門の次男である伊八郎義利（1756～1823）は、天明元年（1781）に次男ながらも新規に召し抱えられ、在方普請役見習いとなりました。その後正規に召し抱えられ、享

和元年（1801）には本郷菊坂（現、本郷四丁目）に屋敷地を拝領し、新しい家を興しました。

伊八郎は、文化7年（1810）には支配勘定格京都御入用取調役に任じられて、家族を連れて京都に移住しましたが、京都から江戸に戻った後、文化11年に本郷御弓町に屋敷地を拝領します。この後は、この屋敷地が田村家の居住地となり

ました。

またこの伊八郎の代から、仕事上で使用する名前として、田村富八郎を名乗るようになっていきます。田村家に伝わる寛政年間（1799～1808）の普請役の名簿にも、「田村富八郎」として伊八郎が載っています。この名簿には、伊八郎の従兄弟にあたる田村七郎次や、その息子である七五郎の名前も載っており、田村家が土木工事を専門とする一族であったことがうかがえます。

この伊八郎が、その後155年に亘って同所に暮らした、弓町田村家の初代にあたります。

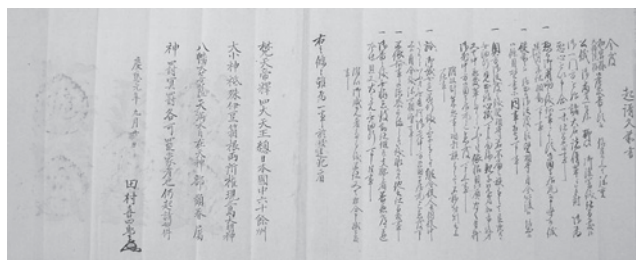
御家人から旗本へ

田村家は、幕府に仕えるようになってからは、代々御家人の家系でした。伊八郎の養子となった弥八郎義智（1790～1858）は、支配勘定出役などを務めました。天保13年（1842）には無役である小普請組に戻されています。

旗本と御家人の違いは定かではありませんが、一般的には将軍に御目見する資格の有無であるといわれています。御家人が旗本格の仕事をしていても、一代限りの資格とされる場合には、旗本の家とは認められず、仕事が終わると弥八郎のように御家人の身分に戻りました。

弘化3年（1846）に弥八郎から家督を継いだ喜四郎義察（1815～1898）は、嘉永2年（1849）に小普請組から大奥を担当する御広敷御侍となり、本寿院様添番格御侍（本寿院は13代将軍家定生母）、天璋院様御用達過人（天璋院は家定夫人）、和宮様天璋院様御用達（和宮は14代将軍家茂夫人）と、奥向きの役職を順調に出世していきました。そして慶応元年（1865）には、和宮様天璋院様御広敷番之頭となって永々御目見格となり、ついに旗本となりました。

喜四郎が御広敷番之頭になるにあたって、老中と若年寄に



【史料1】田村喜四郎起証文

宛てて作成した起請文が、国立公文書館内閣文庫江戸城多聞櫓文書に残されています【史料1】。この史料で喜四郎は、和宮・天璋院附の御広敷番之頭になるにあたって、「公儀御為」を第一として法令や風儀を順守することなど、6ヶ条の誓いをしていきます。6ヶ条の中には、「不依何事、御隠密かましき義承候共、他言仕間敷事」と、秘密めいたことを見聞きしても言いふらさないようにという、大奥の担当らしい条項などもあります。

御広敷番とは、主に大奥の人やモノの出入りを検査する役職で、大奥の関門ともなる役職でした。この他にも、大奥に

仕える奥女中の外出などにも同行しており、田村家資料には、大奥に関する史料も多く伝えられています。

幕末の御広敷番

江戸幕府最後の将軍となった15代将軍徳川慶喜(1837～1913)は、慶応2年12月5日に、征夷大将軍に就任しました。慶喜は、御三家の水戸藩主徳川斉昭の7男として小石川の水戸藩邸(現、後楽一丁目)で生まれ、御三卿の一橋家を継ぎ、慶応2年8月には徳川宗家を継ぎました。将軍在任期間中の慶喜は、京都を中心に展開された幕末の政局に対応するために京都・大坂で過ごし、江戸には戻りませんでした。

当時の江戸城には、13代将軍家定の正室である天璋院、14代将軍家茂の正室である静寛院宮(和宮)を始め、家定生母である本寿院、家茂生母である実成院など、多くの将軍夫人が住んでいました。このためもあってか、慶喜正室の美賀子は、慶喜の将軍就任後も一橋屋敷に住み続けていました。喜四郎たち御広敷番も、大奥だけではなく、一橋家の奥御殿も担当するようになりました。

慶応4年初頭、鳥羽・伏見の戦いに敗れた慶喜が寛永寺大慈院に謹慎し、官軍の江戸城総攻撃がおこなわれるという噂が流れる中で、天璋院や静寛院宮、勝海舟などが、幕府と官軍の衝突を回避するために活躍したことが知られています。天璋院や静寛院宮の使者としては、大奥の女中が官軍に出向いたので、御広敷番たちも使者に同行していました。またその一方で、御広敷番の役人たちは、将軍家一族の落ち着き先を探す仕事にも携わっていました。

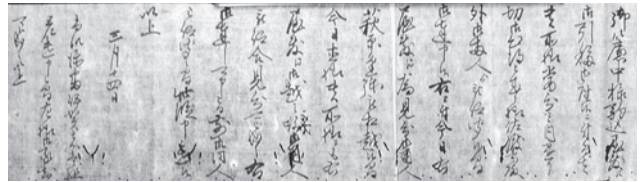
慶応4年2月頃と思われる田村家資料の中には、加賀藩前田家に嫁いだ溶姫(11代将軍家斉娘)は金沢へ、久留米藩有馬家へ嫁いだ精姫(12代将軍家慶養女)は久留米へなど、将軍の子女の転居の様子を伝える史料があります。これらの史料から、江戸在住の将軍家一族の動向を御広敷番が確認していた様子が伝わります。

慶喜夫人の転居先

慶喜夫人の美賀子(1835～94)は、一条家の養女として、安政2年(1855)に一橋家の慶喜のもとに輿入れをしました。一橋家では、美賀子の住む御殿を“桜御殿”、美賀子を“桜御殿様”とも称していました。

前述のように、慶喜が将軍に就任した後も、美賀子は一橋家に住み続けていました。江戸城開城が近づくにあたって、美賀子の落ち着き先を探すのも、大奥を担当する御広敷番たちの仕事になりました。慶応4年3月14日付の喜四郎宛の書状【史料2】では、水戸藩駒込屋敷(現、東京大学農学部辺り)が、美賀子の転居先候補として挙げられています。慶喜は水戸藩の出身でもあるので、その夫人の転居先も水戸藩に関連する場所が候補地とされたものと思われます。

この書状では、同日におこなわれる駒込屋敷の検分に喜四郎も立ち会うようにと伝えられています。検分は不調に終



【史料2】御簾中様駒込屋敷江御引き移りに付

わった模様で、16日には新たな候補地として水戸藩小梅屋敷が挙げられます。小梅屋敷とは、水戸藩の蔵屋敷があった場所で、明治4年(1871)以降は、水戸徳川家の本邸になりました。現在では、隅田公園の一部になっています。

検分の結果、小梅屋敷が転居先に選ばれたようで、慶応4年3月20日付けの書状では作事方なども含めた検分の予定がたてられています。この後、美賀子は4月6日に江戸城内の一橋屋敷を出て、水戸藩邸に移りました。『慶喜公御実記』などには、小石川邸に移ったと書かれていますが、おそらくは小梅屋敷に移ったものと思われます。

この後喜四郎は、明治元年12月には「桜御殿付」となり、正式に美賀子に仕えるようになりましたが、明治2年9月には人減らしのために配置替えとなり、明治3年4月には隠居して、既に新政府の仕事始めていた養子の金三郎義質(1847～1898)に、家督を譲りました。

その後の田村家

明治維新後も、田村家は御弓町に住み続けています。喜四郎の跡を継いだ義質は明治政府に仕える官僚として、義質の跡を継いだ光頭(1868～1934)は病院を経営する医師として、さらに光頭の孫娘にあたる富美子(1906～1988)はテニスプレイヤーとして、それぞれの分野で活躍しました。



中央が田村富美子

特に富美子は、大正12年(1923)にダブルスの日本代表として第6回極東選手権競技大会(極東オリンピック)に参加して優勝し、日本人女子で初めて国際大会で優勝したテニスプレイヤーとなりました。当時はプロマイドが発売されるほどの人気だったそうです。

田村家資料は、既に平成9年度特別展「本郷に生きたサムライの生涯」などにおいて紹介されています。それから16年が経過し、今年度の収蔵品展では、歴史館で調査・研究を積み重ねた成果を、みなさまにご紹介したいと考えています。

(加藤芳典)

館蔵資料より

『老樹名鑑』と室田老樹齋

「老樹名鑑」また「老樹擁護之鼓吹」と題したこの番付は、1909年、東京市芝新堀町の室田新次郎という人物により発行されています。

『日本人名大事典』（1938年初版）によると、この人物は、日本橋生まれ（1866－1930）、桜の研究家で、号を老樹齋とし、内閣印刷局を40歳の頃辞め、いくつかの職を経験の後、小石川植物園の囑託となったということです。また品川御殿山における桜の伐採を見て、桜擁護を志し、東京府内に散生する桜の老樹銘木につき実地踏査を行い、立木のまま「樹齢を観る一種の勘を会得」したとあります。

1930年8月5日東京朝日新聞朝刊は、「桜の老樹齋翁逝く」の見出しで、8月4日に逝去した老樹齋（享年65歳）の追悼記事を掲載しています。記事は「桜や名所古跡の物識りで賑やかな名物男」「お花見をするほどの人でしらぬものもない名物男」、あるいは「東京中を隅から隅まで歩き回つて古事来歴では知らぬものがなく」など、その人物像を紹介しています。

さらに、この時代の老樹齋関連の記事各種を調査すると、時には史跡めぐりの講師をつとめたり、ラジオに出演し老樹・名木を語ってみたり、小石川植物園や本郷で発見された地下穴に興味を示し、調査をしたり、歴史に関する談話を発表したり、氏の桜開花予想が「首かけて予言」として紙面を賑わしたり、自宅で催した旧暦の七夕祭りが「ほんとうの七夕祭り」の見出しで写真つきで紹介されたりという、かなり多方面での活躍を知ることができます。また、これら記事では老樹齋は、「御馴染の」「小石川植物園の名物男」「老樹齋翁」などと称され、親しまれていた様子がうかがえます。この老樹齋、現時点においては、特別に著名な歴史上の人物ではないかもしれませんが、しかし、実に興味深い文京ゆかりの人物ではないでしょうか。

その老樹齋が作成した番付「老樹名鑑」は、タテ78cm×ヨコ55cmと、かなりの大判です。「例言」には、「或ル勤メノ余暇数年間ニ巨リ府内ノ老樹一百年以上ノモノ凡五万本ノ内百五十年以上ノモノ約八千本ノ年数測量ヲ為シ…」とあり、その中から「選抜シ此表ヲ編纂セシ」としています。また、これらのなかで「年数ノ断定」が困難な老樹は、保管者等の聞き取りにより暫定的に樹齢を決めたこと、あるいは「夥多の樹木本数」を調査したため、「見落シ」「書損」あるいは「似依り」の樹種を混同したものがあろうことなどを記し、後の「訂正補足」により「完全タラシメン事ヲ期ス」としています。

いずれにせよこの番付は、発行当時、老樹齋が樹齢200年以上と判定した東京府内の「老樹」のなかから、銀杏・榎・樅・楠・椎・杉・槻・榎・松・樅^{※1}など合計355本も記載する、壮大なものとなっています。

特筆すべきは、この番付の東西両横綱を、ともに現在の文京区域にあたる「本郷楠家楠（本郷区弓町）」^{※2}、そして「光園寺大銀杏（小石川区久堅町）」としていることです。さらには、行司に「阿部家ノ榎（本郷区西片町）」「根津神社ノ榎」、前頭に「澤蔵司神社脇榎（小石川区表町）」「新長谷寺銀杏（小石川区関口駒井町）」「日賀田家銀杏（小石川区原町）」「家康公馬繫杉（本郷区曙町）」「酒井家銀杏（小石川区原町）」「台町小学校榎（小石川区小日向台町）」「大塚町銀杏（小石川区大塚町）」「太田原榎（本郷区駒込千駄木町）」「伝通院前樅」「白山神社銀杏」「久世原ノ榎（小石川区小日向台町）」「駒込富士榎（本郷神明町）」「護國寺ノ松」ほかを配しています。

「本郷楠家楠」のこの当時の所有者は、楠家（南北朝期の武将楠木家の末裔と伝えられる家系で、江戸時代は甲斐庄家を名乗っていました）でした。この楠は、現在も歴史的な大木として、その姿を我々に見せてくれます。また災害・寿命ほか、さまざまな理由で見ることのできなくなってしまった「老樹」も数多くあります。

人にそれぞれの歴史があるように、木にもそれぞれの歴史があります。老樹齋苦心の大作であろうこの番付は、時を経て、我々にそのことを感じさせてくれます。

（東條幸太郎）

※1 樹種名は、資料の原文通りに記載しました。

※2 樹木の所在地は、資料の原文通り旧町名で記載しました。



平成24年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「歴史館でクイズに挑戦! わがはい君歴史塾」

◆7月21日(土)～9月2日(日) 参加者数……297人



歴史教室

歴史講座

「駒込のやっちゃば ―江戸の三大市場―」／熊井保氏(東京家政学院大学教授)

◆9月8日(土) 会場:ふるさと歴史館地下1階視聴覚室 参加者数……73人



歴史講座

特別展

「森鷗外生誕150年記念 近代医学のヒポクラテスたち」

◆10月27日(土)～12月9日(日)(延べ38日間) 入館者数……3,375人

◆記念講演会

11月25日(日) 会場:文京区男女平等センター 参加者数……92人

「闘病と文学 書くこと、表現することと生きる力」

／柳田邦男氏(ノンフィクション作家)

◆展示解説 11月1日(木)、11月15日(木)、11月29日(木)

◆まち歩き 11月8日(木)、12月6日(木)

◆バスハイク 11月22日(木)



特別展

収蔵品展

「9cm×14cmの世界 ―絵はがきに見る文京―」

◆2月9日(土)～3月17日(日)(延べ32日間) 入館者数……2,687人

◆展示解説 2月16日(土)、3月1日(金)、3月12日(火)



収蔵品展

ミニ企画

◆4月3日(火)～6月24日(日) 「昭和初期の広告―商店双六―」

◆6月27日(水)～9月23日(日) 「涼風を呼ぶ ―名優・花柳章太郎の扇子―」

◆9月25日(火)～12月25日(土)

「弓町に住んだサムライの末裔 ―明治の若き医師、田村光顕―」

◆1月16日(火)～2月12日(日) 「心の交流 ―水戸徳川家と朝鮮通信使―」



ミニ企画展示資料「商店双六」

史跡めぐり

◆第1回 6月8日(金) 「新緑の目白台を歩く」 参加者数……36人

◆第2回 11月15日(木) 「区境を歩く ―谷根千を巡って―」

参加者数……36人

◆第3回 3月14日(木) 「徳川家康生母於大の方ゆかりの地を中心に」

参加者数……47人



ミニ企画「弓町に住んだサムライの末裔」



史跡めぐり

平成25年度の催し

※それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、「区報ぶんきょう」およびホームページにて、お知らせします。

ミニ企画

弓町に住んだサムライ 一幕臣が見た最後の将軍—
4月16日(火)～7月15日(月・祝)
その他テーマにて、年度内に計4回の展示を予定しています。

歴史講座

寛永寺の浦井正明先生に、徳川慶喜に関わる講演を頂きます。
9月29日(日) 実施、参加費200円を予定。往復ハガキにて事前申込。
定員を超えた場合は抽選となります。

小・中学生のための夏休み歴史教室

わがはい君観測隊 いろんな数を調べてみよう!(仮)
7月20日(土)～9月1日(日)
夏休みに文京ふるさと歴史館の展示を見学してクイズに挑戦する、自由参加方式の歴史教室です。

徳川慶喜顕彰事業

没後百年を記念した徳川慶喜に関わる催しです。
上記の歴史講座を始め、様々な事業を予定しています。

特別展

受け継がれた住まい ー今に生きる文京の近代建築ー
10月19日(土)～12月1日(日) ※11月3日(文化の日)は無料公開日
旧安田邸(千駄木)、村川邸(目白台)、瀬川邸(本郷)を中心に、文京の近代建築について展示します。

森鷗外記念館開館1周年記念事業

朗読コンテスト本選10月6日(日)
記念講演会10月26日(土)

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。
年3回(6月、11月、3月) 開催予定。要申込(往復はがきにて)。
参加費(保険) 40円。

レファレンス

毎週木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて実施。地域学習のお手伝いや、地域史に関するご質問にお答えします。

収蔵品展

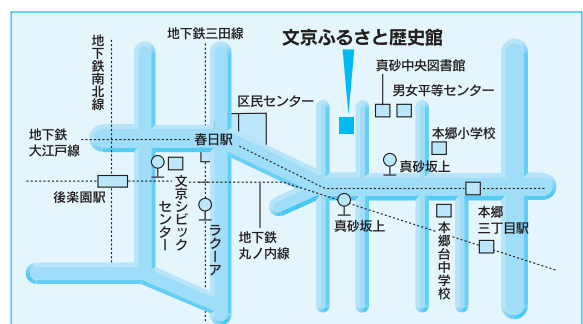
武士の家系図(仮)
平成26年2月8日(土)～3月16日(日)
文京ふるさと歴史館で所蔵する田村家資料から、武士の家の様子を紹介します。

ボランティアガイド

ふるさと歴史館ボランティアガイドにより、常設展示の解説を行います(無料)。詳細はお問い合わせ下さい。

利用のご案内

- ◆開館時間：午前10時から午後5時まで
- ◆休館日：月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日) くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料：一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
*特別展は別に定めます
- ◆交通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスBーぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分
- ◆ホームページ：<http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>



文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221